The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	吐魯番・烏魯木斉周辺地域の史跡について
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	内陸アジア史研究. 1992, 7-8, p. 66-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

吐魯番・烏魯木斉周辺地域の史跡について

荒川　正晴

吐魯番・烏魯木斉周辺に散在する考古遺跡は、これまでに確認されているものだけでも、既に膨大な数にのぼっている。具体的には、吐魯番地区および烏魯木斉市の文物普査隊による報告を通して、その概況を知ることができる(1)が、今回参観し得た遺跡は、そのうちのほんの一部に過ぎない。従って、今回の短期間の参観から何等かの結論を早急に導出することは困難であり、以下の報告も当地域の特定の遺跡に関するメモの域を出るものではない。しかしながら、今後当該地域の歴史研究を進める上で、こうした考古的な発掘を経た遺跡に関する情報を現段階で不十分ながらも整理しておくことは、たとえそれが如何に断片的なものであっても決して無駄ではない。もとより完全は期しがたいが、ここに吐魯番・烏魯木斉周辺の史跡調査の経過報告として、各遺址に関する基礎情報の整理を試みる所以である。以下、各遺址について、(a)＝遺跡の位置、(b)＝遺跡の性格と推定年代、(c)＝遺跡に関する各種基礎情報の順に掲げておく。

ところで、今回参観した遺跡をその性格によって敢えて分類するとすれば、（１）烽燧遺址　（２）古墳群墳墓　（３）古城址　（４）石窟遺址　（５）その他となろう。これらの遺跡は、政治・宗教・軍事にわたる多彩な内容をもつが、時代的には、当地の歴史に即して言えば、大半が高昌国より唐西州時代に属す。そこで報告にあたって、特定の遺跡については、参観遺跡の基礎情報の提供とともに、その遺跡が提起している当該時期の歴史に関わる諸問題についても、簡単にコメントを付した。

（１）烽燧遺址

〖１〗　塩湖烽燧（俗名は土墩子）

(a) 塩湖車站の西北約1km【N 43°25′ 25″ ／E 88°05′ 00″ 】(2)

(b) 唐代の烽燧跡

(c) 崩落が著しいが、自治区文物普査弁公室と烏魯木斉市文物普査隊による測定では(3)、残高6m、頂上部の面積が25m²あり、基底部では南北15m、東西14.5mの規模をもっている。上部は、塼を横積みにし、中下部は竪積みにしている。塼の大きさは、36×18×11cm。

そもそも、烽燧とは、前線に布置される軍事施設であり、外敵の侵入等を監視し異変を速報するための煙火台であり、辺境における警備を担当する。漢から唐代までの、その全般的な制度の内容と変遷の概要については、既に程喜霖氏が詳細に検討されており(4)、ここで改めて説明を加える必要はない。しかしながら、個別的にみると、とりわけ唐代の烽燧は、その規模・形態・機能などにおいて、なお不明な部分が少なくなく、今後の検討にまつべき問題が残されている。

この烽燧が設置された、烏魯木斉市から吐魯番市に向かうルートには、さらに達坂城の南にも唐代の烽燧遺跡があるらしいことが、1987年に当地を訪問された白須浄真氏によって報告されている(5)。おそらくこれらは、唐代の白水澗道＜烏拉泊古城（北庭都護府輪臺県城址）周辺から交河故城方面を結ぶ交通路＞上に配置された烽燧遺址とみて大過あるまい。とりわけ、達坂城の南方には、白楊溝峡谷の西口に位置する古城址があり、ここを調査された王炳華氏は、同城址を白水鎮城址に比定されている(6)。また、白水烽と呼ばれる烽燧があったことも、程喜霖氏が、王炳華氏の教示によるとして紹介された、烏魯木斉南山阿拉溝口烽火台遺址（次掲の烽燧一覧表の（28）の阿拉溝烽燧。（2）の石塁（塔什吐尓）と同一の遺址か？）出土の文書残片により確認されている(7)。文書の出土地点からも、この白水烽が白水鎮に近在していた可能性はきわめて高いものと思われ、先の達坂城南方の烽燧遺址との関係に注目される。

さらに同文書残片には、以下に掲げるように、白水烽を含む八つの烽名と一つの鋪名が載せられていると指摘されている(7)。

烽	白水烽・鸜鵒烽・鳧水烽・黒鼻烽・名岸烽・礓石烽・阿施烽・青山烽
鋪	断賊鋪

程喜霖氏は、近時出土のトルファン文書を利用して、この烽と鋪の関係について、次のように結論されている。即ち、出土文書には、「烽鋪」という用語が散見するが、これは唐代になって初めて現れたものであり、しかも単に烽燧を言い換えただけの呼称ではない。前掲の文書以外にも、阿斯塔那226号墓出土の「唐伊吾軍牒為申報諸烽鋪　田所得斛斗数事」（72TAM226:84,86/1,86/2,86/3　『文書』８、pp.209-211）を見てもわかるように、烽と鋪とは明確に区別されている。従って「烽鋪」とは、烽と鋪とを併称したものであると推測され、具体的には烽とは烽燧を、鋪とは『通典』巻152に載せられる馬鋪を指していると考えられる。この馬鋪とは、要路

・山谷の間に馬二疋を牧し、軍事上の緊急事態が発生した場合に、近在の州県に牧馬を遣わして馳せ報じるのをその任務としている。これは、煙烟や火で緊急事態を知らせる烽燧と相互に補完する機能をもつもので、烽燧の作成する「伝牒」を騎を差遣して伝えるものとする。氏は、馬鋪は烽燧の下部機関であった可能性を認められており、一般的には馬鋪は烽燧とともに設置されていたと指摘される。ただし、駅が烽燧の近くに置かれている場合には、烽燧の「伝牒」は馬鋪の牧馬ではなく、駅馬を利用して報告することになっていた。従って、近くに駅が設置されている烽燧は、特に馬鋪を置く必要はないことになる。

以上の程喜霖氏の見解は、必ずしも十分に論証されているとは思われないが(8)、当地において、鋪が館の前身として存在していた例もある（和平鋪と済濁館）ことを考慮するならば、これが公的な通信・交通に関わる機関であったことは認められると思われる。何れにしてもこれまでに発見されている、烽燧・戍堡をはじめとする軍事施設に関係すると思われる諸遺跡の性格を推断してゆく際に、烽と明確に区別される鋪の存在は今後十分留意しなければならず、その実態の解明が急がれる。

ところで、王炳華氏は、この南山阿拉溝口烽燧遺址に近在する古城址を鸛鵠鎮に比定され、それを受けて程喜霖氏は、同烽燧遺址を鸛鵠烽に同定された(9)。先に見たごとく白水烽が、達坂城南方の烽燧遺址と関係するものとすれば、これら文書に見える烽燧の多くは、現在の達坂城南方の吐魯番市へ延びる自動車路の西方の山間部を、阿拉溝口に向かって配置されていたと推測される。このことは、唐代に天山県（托克遜）を起点とする銀山道とともに、白水澗道から枝分かれして、吐魯番盆地の交河・天山県を経由しないで直接焉耆方面に通じるルートも活用されていた可能性を示唆している。

必ずしも、烽燧ルートと通常の交通路とが一致しているわけではないが、たとえば、トルファン文書（「唐貞観二十二年（648）庭州人米巡職辞為請給公験事」<73TAM221:5>、『文書』7、pp.8-9）に

1　貞観廿二［　　］庭州人米巡職辞
　　（中　略）
5　州司。巡職今将上件奴婢駝等、望於西
6　州市易。恐所在烽鑞、不練来由。請乞
7　公験。請裁。謹辞。
8　　巡職庭州根民、任往
9　　西州市易。所在烽
10　　鑞勘放。懐信白。

11　　廿一日。

と見え、烽燧は一般の往来人の所持する過所（パスポート）をチェックする機関ともなっていた。今回参観した塩湖烽燧を含め、この地域の烽燧遺址の配置関係を丹念に復原して行けば、当時のメインルートの一つである白水澗道を始め、当時利用されていた支線を含めた諸ルートをほぼ確認することができよう。今後の同地域での烽燧遺址に関するさらなる調査が期待される。

もちろんこれまでにも数多くの烽燧遺跡が吐魯番周辺で確認されているが、今ここに漢代より唐代に属すものに限定してあげれば以下のとおりである（「吐魯番地区普査資料彙編」の「吐魯番地区文物分布目録」および「烏魯木斉市文物普査資料」の「烏魯木斉市文物概況一覧表」などによる）。

（1）	塩湖烽燧	N 43°25′ 19″ ／E 88°05′ 44″
（2）	石墨（塔什吐尓）	N 42°49′ 39″ ／E 87°52′ 50″
（3）	烏拉泊村烽燧	N 43°34′ 26″ ／E 87°41′ 04″
（4）	布干烽燧（布干吐尓）	N 42°52′ ／E 88°41′
（5）	亜尓湖烽燧	N 42°59′ 04″ ／E 89°02′
（6）	艾丁湖塔什烽燧	N 42°55′ 50″ ／E 89°12′
（7）	塩山烽燧	N 42°55′ 50″ ／E 89°05′ 22″
（8）	庄子坎烽燧	N 42°44′ 35″ ／E 89°18′ 33″
（9）	干溝烽燧	N 47°58′ 23″ ／E 89°23′ 44″ (?)
（10）	煤窰溝烽燧	N 43°07′ ／E 89°23′ 16″
（11）	七泉湖薩依烽燧	N 43°06′ 05″ ／E 89°25′ 09″
（12）	勝金口烽燧①	N 42°55′ 28″ ／E 89°33′ 49″
（13）	勝金口烽燧②	N 43°00′ 08″ ／E 89°30′ 27″
（14）	勝金口烽燧③	N 42°59′ 06″ ／E 89°36′ 38″
（15）	勝金口烽燧④	N 43°00′ 32″ ／E 89°31′ 53″
（16）	勝金口烽燧⑤	N 42°55′ 11″ ／E 89°34′
（17）	木尓土克薩依烽燧	N 43°01′ 55″ ／E 89°27′ 38″
（18）	烏江不拉克烽燧	N 42°58′ 50″ ／E 89°31′ 11″
（19）	七康湖烽燧	N 42°57′ ／E 89°36′ 16″
（20）	阿其克墩烽燧(泡合墩)	N 40°38′ 21″ ／E 89°32′ 33″
（21）	迪坎尓烽燧	N 42°34′ 21″ ／E 89°53′ 57″

(22)	吐尓買来烽燧	N 42°43′ 45″ ／E 89°46′ 23″
(23)	阿薩県亥尓烽燧	N 42°35′ 09″ ／E 89°37′ 17″
(24)	漢墩阿克墩烽燧	N 42°54′ 13″ ／E 90°02′ 53″
(25)	東湖烽燧	N 42°51′ 43″ ／E 90°22′ 12″
(26)	三十里大墩烽燧	N 42°55′ 35″ ／E 90°20′ 37″
(27)	賽克散土墩烽燧	N 43°15′ 26″ ／E 90°36′ 54″
(28)	阿拉溝烽燧（2）と同一か?	N 42°51′ ／E 87°52′
(29)	恰特喀勒烽燧	N 42°53′ ／E 89°22′
(30)	二塘溝烽燧※(10)	

文書史料からは、先に掲げた烽燧を含めれば、現在までに２６烽燧の名が確認されているが、これらの具体的な比定はほとんど進められていない。ただし、神山烽と赤山烽については、程喜霖氏は、神山烽を西州交河県神山郷に、また赤山烽を勝金口付近に位置していたと推測されている(11)。

前掲表のうち、（５）亜尓湖烽燧と（７）塩山烽燧は、交河城の南北を抑える烽燧であり、また（10）～（18）の烽燧は、高昌故城の北方、勝金口以北に配置されたものである。いずれもトルファンの中心城邑である高昌城および交河城の防衛を固めるために、多くの烽燧が設置されていたことが確認される。とりわけ、勝金口周辺より以北に置かれた烽燧遺址は、現在確認されている範囲に限られるが、圧倒的にその数が多い。具体的には、木頭溝の北に位置する天山の煤窰溝峡谷を流れる河＜同河は、天山を出ると二方向に分流し、一つは木頭溝より勝金口にいたり、一つは葡萄口にいたるが、そのうち木頭溝より勝金口にいたる河＞筋に沿って、北から南に向かって（10）煤窰溝烽燧・（11）七泉湖薩依烽燧・（17）木尓土克薩依烽燧・（12）勝金口烽燧①・（16）　勝金口烽燧⑤・（18）烏江不拉克烽燧が置かれている。さらに木頭溝河と七康湖ダムの流水が会する地点に、（13）勝金口烽燧②と（14）勝金口烽燧③が列置される。恐らくは、唐代に北庭城と西州城を結んだ烏骨道と呼ばれたルート上に位置していたと思われる。

今後の調査の進展に待つべき点が多いが、高昌城および交河城と北方の北庭地域とを結ぶ白水澗道と烏骨道が、重要な通信・交通ルートであったことは疑いなく、この両道に沿って多くの烽燧が配置されていたと思われる。塩湖烽燧は、そのうちの一つに過ぎない。

また今回参観した烽燧遺址の規模は、上記(c)に掲げたごとく残高6m、頂上部の面

積が25㎡あり、基底部では南北15m、東西14.5mの規模をもっているが、この数値を、他の唐代吐魯番地区の烽燧遺址と比較して見ると、次の通りである（「吐魯番地区普査資料彙編」に載せるデータによる）。☆は、烽燧台そのものの規模に関するデータを示し、遺址全体の数値なのか、烽燧台のそれなのかわからない場合は、★を付した。無印は、烽燧台を包含した遺址全体の規模を示す。

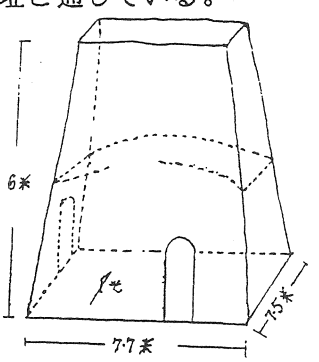
	烽燧遺址	面積	高さ（烽燧）
（４）	布干烽燧（布干吐尔）	★約272㎡	
（５）	亜尔湖烽燧	☆14.4×18.6m	約5m
（６）	艾丁湖塔什烽燧	★63㎡	約5m
（７）	塩山烽燧	☆10×10m	約1.7m(残高)
（８）	庄子坎烽燧	★12×11.3m	約5m（残高）
（９）	干溝烽燧	☆5.8×6m	約2.6m（残高）
(10)	煤窰溝烽燧	9.40×12.90m(121.26㎡)	
		☆7.5×7.7m(57.75㎡)	約6m
(11)	七泉湖薩依烽燧	☆8.3×8.3m	約7.8m
		☆5.3×4.6m(頂上部)	
(12)	勝金口烽燧①	☆5×5m	約1.7m
(13)	勝金口烽燧②	☆13×18m	約10.2m（残高）
(14)	勝金口烽燧③	☆15×14m	約13m
		☆8.3㎡(頂上部)	
(15)	勝金口烽燧④	☆土墩(残高6.5m×長15.3m×最寛処5.4m)	
(16)	勝金口烽燧⑤	☆7×7m	約5.0m(残高)
		☆5.5×5.5m(頂上部)	
(17)	木尔土克薩依烽燧	18.5×18.5m	
		☆5×3.4m	約10m（残高）
(18)	烏江不拉克烽燧	☆11.3×11.3m	約7.38m
(19)	七康湖烽燧	☆6.8×5.8m	約1.8m（残高）
(20)	阿其克墩烽燧(泡合墩)	★約878㎡	
(21)	迪坎尔烽燧		
(22)	吐尔買来烽燧	★約360㎡	
(23)	阿薩県亥尔烽燧	★約5400㎡	

(24)	漢墩阿克墩烽燧	★約25.76㎡	
(25)	東湖烽燧	☆16×9.8m、156.8㎡	約5.2m(残高)
(26)	三十里大墩烽燧	★約25㎡	
(27)	賽克散土墩烽燧	★約67㎡	
(28)	阿拉溝烽燧	31.3×30.5m、954.65㎡	約10m
(29)	恰特喀勒烽燧	☆15.3m×13m	

これらの烽燧のうちのいくつかは、形態も含め、より詳しいデータが、「吐魯番地区普査資料彙編」の46-58頁に併せて載せられているので、以下に簡単に記しておく。

(10) 煤窰溝烽燧

この烽燧は、煤窰溝谷断崖の東崖に位置しており、西南の葡萄口までは約13.5km、東南の七泉湖薩依烽燧までは３kmほど離れている。遺跡は東西方向に位置し、ほぼ長方形（南北9.40m×東西12.90m）を呈している。また面積は121.26㎡あり、全体は烽燧と住居址の両部分より成っている。烽燧の遺址は、東北角にあり、南北7.5m×東西7.7m、面積57.75㎡。形態は、台形状で、高さは６mある。塼（75×25×15cm）を積み上げて構築され、西側面より南側面にかけて頂上部にのぼる足踏み段が確認される。また烽燧内部には、一つのアーチ形天井をもつ部屋があり、出入口は南側に開かれ、さらに西側の壁にも門口が一つ設けられ、住居址と通じている。

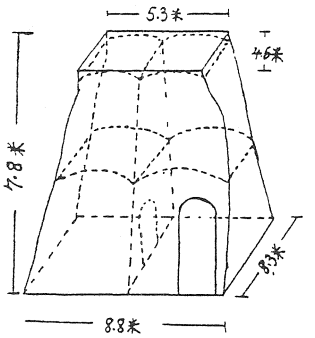


(11) 七泉湖薩依烽燧

比較的保存が良好で、基底部の平面は、ほぼ方形（南北8.3m×東西8.3m）。形態は台形状で、高さは約7.8m。塼築。

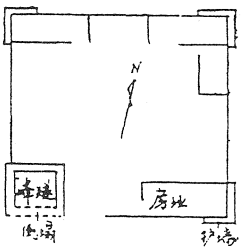
烽燧内部は、上下両層より成り、それぞれの層に、アーチ形天井をもつ部屋が二つずつある。底層の門口は、東側の部屋の東（南？）に開かれ、また西の壁に門口を設け、西側の部屋と通じている。上層も同様の建築形式となっている。烽燧の頂

上部は、平台で長方形を呈し、東西5.3m×南北4.6mの規模をもつ。底層の壁の厚さは、1.6m。内部の部屋から烽燧の頂上部にのぼったと考えられるが、部分的に崩落しており、断定は困難。



（17）木尓土克薩依烽燧

木尓土克薩依戍堡の一部を形成する。戍堡は、南北方向に位置し、ほぼ方形を呈す（18.5m×18.5m）。周囲の城壁の西北角・東北角・東南角に台形の護墻があり、壁の高さは3.4m、厚さは0.65m。戍堡の北・東・南壁面に接して住居址があり、それぞれ矩形。烽燧は、戍堡の西南角にある。烽燧の基底部は、ほぼ方形（5m×3.4m、南部は崩落）。台形状で、残高10m。内部は空洞で、塼築。



（13）勝金口烽燧②

木頭溝口の東西両側に各々一つの烽燧遺址があり、両烽は２km離れている。基底部の平面は長方形（長18m×寛13m）であり、台形状を呈す。版築。

（12）勝金口烽燧④

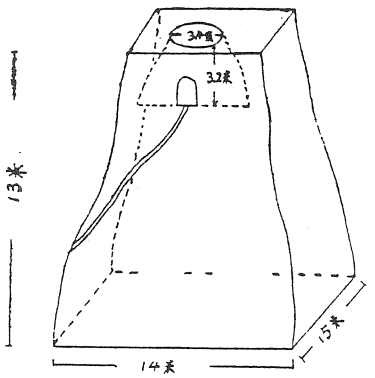
木頭溝口河の東500mに位置する。烽燧は、土墩の上に建てられており、土墩内部は塼築で、アーチ式住居址が認められる。土墩の残高6.5m×長15.3m×最寛処5.4m。

（18）烏江不拉克烽燧

烽燧の基底部平面は、ほぼ方形を呈し、一辺は11.3m。台形状で、残高7.3m。頂上部は平台で住居址が存在する。版築。

（14）　勝金口烽燧③

七康湖烽燧まで4km、勝金口站まで14.5km。東北～西南向きに位置し、基底部の平面は、方形に近い（南北15m×東西14m）。基底部より中央の腰部までは、弧線状で、上半部～頂上部は台形。基底部の西側より、足の踏み場に沿ってよじ登り、南側のアーチ形門口より、烽燧上層部の部屋に入る。塼築のアーチ式建築。部屋の高さは3.2mで、方形（5.7×5.7m）。天井部に、直径3.2mの円洞がある。この円洞より烽燧の頂上にある平台に至るようになっている。平台の面積は、約8.3m²。烽燧の高さ13m。版築（ただし上層の部屋を除く）。



（19）　七康湖烽燧

勝金鄉七康湖水庫の南200m。遺跡は、すでに崩壊しており、残留部分からの計測によると、南北5.8m×東西6.8mあり、塼を積み重ねて構築する。残高1.8m。中は空洞になっていたと推測される。

（16）　勝金口烽燧⑤

勝金口千仏洞の西北400m。烽燧の東側は崩落しているが、現存部分より見ると、基底部分の平面は方形（一辺7m）、頂上部は一辺5.5m。残高5m。基底部は版築の上に、再度塼を積み重ねて構築。

（12）　勝金口烽燧①

勝金口烽燧⑤の西250m、勝金口千仏洞の西北700m。基底部分は、方形（5×5m）。残高1.7m。塼築。

（９）　干溝烽燧

烽燧は、南北方向に位置し、方形を呈する。南北6m×東西5.8m。残高2.6m。塼築。

（29）　恰特喀勒烽燧

烽燧は、南北方向に位置し、南北15.3m×東西13m。版築。

（５）　亜尓湖烽燧

交河故城の北3.5km。版築。版層10mm前後。基底部は方形で、二層の段状になっている。下層は、東西14.4m×南北18.6m。上層は、東西11.3m。台形で、高さ約5m。

（７）　塩山烽燧

交河故城の東南約4km。遺址は二つの部分より構成され、南面は烽燧、北面は仏塔遺址である可能性あり。烽燧の基底部分（方形、10×10m）は版築で、上部は塼築。残高1.7m。

（28）　阿拉溝烽燧

南北31.3m×東西30.5m。面積954.65m²。城堡は、基本的に円形からなり、烽火台・住居址・城壁・城外の囲壁より成っている。烽燧は、城堡の西北角に位置する。台形状。修築を施し現在は、高さ約10m。

（25）　東湖烽燧

鄯善県城東10km。東西約16m×南北約9.8m。残高約5.2m。面積約156.8m²。版築（版層19cm前後か）。後に塼を積み重ねて修築（塼31×16×9cm）。

程喜霖氏も指摘されるように、『武経総要』前集巻五の唐兵部有烽式には、「台高五丈、下闊三丈、上闊一丈、形圓･･･」とあり、烽燧台の高さが約15m、その形状は円形であり、基底部の直径三丈（約9m）、烽燧台の頂上部の直径が一丈（約3m）ほどの規模を伝えている。吐魯番地域に設置された烽燧の規模は、上掲のデータに基づけば、高さ5～13m、基底部での広さは5.6m～18m四方前後、頂上部では5m四方ほどの広さがある。構造的にも烽燧と住居遺址とが接する複合的な遺址も珍しくなく（烽燧名の下に傍線を付したもの）、これから見れば、規模や形態のばらつきが目立っている。この点、前表中の烽燧には、漢代と推定して報告しているものもあるため、その時代推定の正否を確認できないが、一部の烽燧には、漢代からはじまる漢人の軍事進出に伴って建てられた烽燧に起源を持つものがあった可能性も認められる。しかしながら、漢代と報告されている烽燧は、前掲一覧表中ごく僅かであり、その規模と形態が多様性を示した理由とするには困難である。設置地域によって、先に掲げた規定どおりに烽燧が建てられるはずもなく、ばらつきが出るのを当然とみなすことを前提に考えれば、基本的には唐の軍事支配に伴い、駐留軍の軍事行動が活発化するなかで設置されたと推測される。ただし、この烽燧のなかに認められ

る、烽燧と住居遺址とが合体した複合的な構造を有する遺址については、これを唐代烽燧の一般的な形態とするには、今後吐魯番地域以外に存在する烽燧遺址との比較検討が必須となろう。

以上から、塩湖烽燧は、上部が崩壊しているため、詳細は不明であるが、他の烽燧の規模と構造との比較から推測するならば、特に異質な部分はなく、吐魯番地域における標準的な唐代の烽燧遺址であったと認められると思われる。

注)

(1) 自治区文物普査弁公室・吐魯番地区文物普査隊「吐魯番地区普査資料彙編」『新疆文物』1988年第3期、自治区文物普査弁公室・烏魯木斉市文物普査隊「烏魯木斉市文物普査資料」『新疆文物』1991年第1期。

(2) 「烏魯木斉市文物普査資料」p.46には、N 43°25′ 19″ ／E 88°05′ 44″ とする。

(3) 「烏魯木斉市文物普査資料」p.5。

(4) 程喜霖『漢唐烽堠制度研究』三秦出版社、1990年。

(5) 白須浄真「中国訪問報告」(第一回吐魯番出土文物研究会大会、1987年8月27日)。

(6) 王炳華「唐西州白水鎮初考」『新疆社会科学』1988年第3期、pp.102-107.

(7) 程喜霖、前掲書、p.194、p.336。この南山阿拉溝口烽火台遺址については、注(1)に掲げた「吐魯番地区普査資料彙編」p.51に、阿拉溝烽火台(魚児溝火車站南約500m、N 42°51′ ／E 87°52′)を取り上げ、本烽燧遺址から唐代の文書が出土していると報告されているので、程喜霖氏の言う南山阿拉溝口烽火台遺址とは、この烽燧遺址を指していると見られる。

(8) 程喜霖氏の見解に従えば、鋪とは烽燧の下部機関として、烽燧の近くに置かれ、その「伝牒」を伝えるのを主要な任務にしていたことになるが、烽の下部機関として鋪が烽の近くに併設されていたことを文書から読みとるのは困難である。

(9) 程喜霖、前掲書、p.194。

(10) 程喜霖、前掲書、p.167に、連木心(レムジン)より70里離れている二塘溝烽燧をあげているが、その詳細は不明である。

(11) 程喜霖、前掲書、p.189。

（２）古墳群

〔１〕　烏拉泊古墳群

(a)　烏魯木斉市の市街南約10km、烏拉泊水庫の南斜面。

【N 43°38′ 40″ ／E 87°36′ 45″ 】

(b)　戦国～西漢時代前後の墓葬群。

(c)　1983年6月-7月，1984年に、新疆考古研究所第一研究室が発掘を手がけている。車師人の墓葬（王炳華・張玉忠説）。全部で46基の墳墓を発掘。石棺墓（17基）・土坑墓（27基）。墳墓は、一定の排列の規律があり、ほぼ南北に並んでいる。墓室は竪穴式で長方形（東西1.10～2.6m、南北0.24～1.33m、深さ0.20～1.22m）を呈し、均しく東西方向に置かれている。また死者は頭を西に、足を東に向けて置かれている。単人葬（36基）、合葬墓（9基）。46基の墳墓のうち、14基の墳墓に牲畜骨（羊頭・馬頭など）が、埋葬者の足下に埋納されていたとされる。また同時に陶器をはじめ、金製の耳飾りや石臼・銅鏡・小鉄器などが出土しており、農耕・牧畜を主な生業としていたと見られる。

【参考文献】

①『中国考古学年鑑　1984』pp.177-178

②『中国考古学年鑑　1985』pp.257-258

③王明哲・張玉忠「烏魯木斉烏拉泊古墓発掘研究」『新疆社会科学』1986年第1期、pp.70-76。

張玉忠氏は、この烏拉泊古墳群以外にも、トルファン周辺における車師人の墓葬群として、托克遜・英亜依拉克（9基）・鄯善・蘇巴什（8基）・吐魯番・艾丁湖（50基）・天山阿拉溝東風机器廠付近（41基）などを掲げられている(1)。

车师墓葬出土文物一览表

地点	数量	时代	各类出土文物统计数(件)	备注
吐鲁番艾丁湖	50座	早期为春秋战国，晚期为西汉	彩陶器65，素面陶器80，石器3，铜器8，铁器7，金器2。	已经扰乱
鄯善苏巴什	8座	同上	彩陶器2，素面陶35，木器17，漆器1，铜器6，铁器4，银器1，骨蚌饰14，玛瑙1，另有许多毛线、毛织物、毛毡及皮制品。	未扰乱
托克逊英亚依拉克	9座	同上	彩陶器1，素面陶1，还有毛绳、毛布，皮革制品、牛角等。	已经扰乱
乌鲁木齐乌拉泊水库区	46座	早期为战国，晚期为西汉	素面陶器52，彩陶8，铜器27，铁器11，石器2，金饰件3，玛瑙项饰2，14座墓中殉有羊头、马头、马匹或其它畜骨。	个别墓扰乱
天山阿拉沟东风机器厂附近	41座	早期为春秋，晚期为战国时期	彩陶器131，素面陶122，木器53，铜器29，铁器3，金器1，骨、玉饰件28，羊头172、马头16，另有多量羊、马、牛骨及毛毡、毛织物、少量草编织物。	未扰乱

王炳華氏は、阿拉溝の山谷に発見された卵石墓室を特徴とする古墳群を取り上げ、これと形式と内容を均しくする墓葬が、前掲の鄯善県の蘇巴什や艾丁湖に発見される(2)ことから、この古墳群の埋葬者の居住地点が、広く吐魯番盆地各所に分布していたことを指摘されている。そしてこの古墳群に関して、1930年代初めに黄文弼氏が発掘した雅爾湖古墳群の溝北地区の墳墓が、車師人の早期の墳墓に属すこと、さらにその随葬品の位置や内容および陶器の特色が、この阿拉溝の墓葬文化と基本的に類似することを根拠として、上掲の古墳群も車師文化に属すと推測されている(3)。また韓康信・潘其風両氏によれば、この阿拉溝の車師人の墓葬群とされる墳墓から出土した遺骨の頭骨は、コーカサス（ユーロペオイド）種の特徴を有すると判断されている(4)。

以上から、現在中国では、車師族の墓葬群が、天山阿拉溝・烏魯木斉周辺からトルファン盆地一帯に広がり、結論を下すには至っていないが、その遺骨から車師族はユーロペオイド種の特徴を有する人種であったらしいことが認められつつあるように思われる。この点については、これらの古墳群を、いわゆる文献上にその名を伝える車師人の墳墓として認められるかどうかの検証作業を継続するとともに、人種（モンゴロイドとユーロペオイド）と民族（アルタイ系とアーリア系）が複雑に交錯する当地域の状況を十分に考慮しつつ、主として文献側から追求された嶋崎昌氏の車師族＝アルタイ系民族説(5)を再度検討する必要がある。とくに嶋崎氏の主張される、「高昌国の土着人はアルタイ系、とくにジュンガリアの民族との関連においてチュルク系と考えられ」「支配層の漢人の間にもチュルク風俗が流行し、（中略）チュルク（トルコ）語を常用することになった」とされる見解は(6)、トルファンには言語上アーリア系に属するオアシス住民がいたのではないかとする考え方とは、対立している。吐魯番出土のトカラ文書との関係もあり、今後検討を深めていかねばならないテーマである。

注）

(1)張玉忠「漢代以前車師人的社会経済生活」『新疆社会科学』1987年第2期、p.68の「車師墓葬出土文物一覧表」。

(2)王炳華氏は、上記のほか更に交河溝北・吐峪溝・斯端克普・和什場子・奇克曼なども車師人の墓葬として認められている。同　『吐魯番的古代文明』新疆人民出版社、1989年、pp.39-40。

(3)馬雍・王炳華「公元前七至二世紀的中国新疆地区」『中亜学刊』第3輯、1990年、pp.4-6。

(4)韓康信・潘其風「古代中国人種成分研究」『考古学報』1984年第2期。また韓康信「新疆古代居民的種族人類研究和維吾爾族的体質特点」『西域研究』1991年第2期参照。
(5)嶋崎昌「姑師と車師前・後王国」『隋唐時代の東トゥルキスタン研究』東大出版会、1977年、pp.3-58。
(6)同上「遊牧国家の中央アジア支配と中国王朝」同上、p.567。

〔2〕 柴窩堡遺址

(a) 烏魯木斉市東南50km【N 43°38′ 40″ ／E 87°36′ 45″ 】
(b) 新石器時代の遺跡（多くの細石器の出土）、青銅期～鉄器時代
三ヶ所に分かれる。
(c) (イ)柴窩堡湖西南岸細石器遺址　(ロ)柴窩堡湖東岸細石器遺址
(ハ)柴窩堡湖墓葬（柴窩堡湖東約1.7km）
東漢以後～隋唐以前ごろの墓葬（遊牧民族の墓葬か？）
1984年10月に新疆社会科学院考古研究所によって発掘。
柴窩堡湖沿岸には、西南岸と東岸に細石器遺址も広がるが、今回参観したのは柴窩堡湖東約1.7kmにある柴窩堡湖古墓群である。長さ約1.83km、幅約0.48kmの範囲内に39の墳墓が南北方向に排列される。参観は、直径50m・高さ４mの最大墳墓周辺。

【参考文献】

① 『中国考古学年鑑　1985』pp.254-255
② 邢開鼎「柴窩堡湖辺的細石器遺存」『干旱区新疆第四紀研究論文集』新疆人民出版社、1985年8月
③ 『新疆文物志選稿』第一輯、pp.19-20
④ 新疆社会科学院考古研究所「新疆柴窩堡湖畔細石器遺存調査報告」『考古与文物』1989年第2期、pp.1-15。
⑤ 自治区文物普査弁公室　烏魯木斉市文物普査隊「烏魯木斉市文物普査資料」『新疆文物』1991年第1期、p.18。

〔3〕 羅爾湖古墓群

(a) 吐魯番市西約10km、交河溝西土崖上

(b)　高昌国～唐代（溝西区）の墳墓群。

(c)　中国による発掘は、黄文弼氏（西北科学考査団）によって1930年に行われている(1)。また本格的なものではないが、首届考古専業人員訓練班によって1956年8月にも発掘されている(2)。当古墳群の発掘経緯については、白須浄真・萩信雄「高昌墓塼考釈（一）」『書論』第13号、1978年、pp.185-187参照。

注）

（1）この時の発掘で、130余りの墓塼と800余りの陶器を獲得している。黄文弼『高昌陶集』1933年、『吐魯番考古記』中国科学院出版、1954年など。

（2）新疆首届考古専業人員訓練班「交河故城、寺院及雅爾湖古墓発掘簡報」『新疆文物』1989年第4期、pp.2-12。

〖4〗　魯克沁墓群（一棵桑樹、布爾土居結木古墓群。）

(a)　鄯善県魯克沁鎮吐格曼博依村北、魯克沁鎮東北約4km。
【N 42°45′ 48″ ／E 89°46′ 49″ 】

(b)　高昌国?（高昌郡?）～唐代墳墓（西州柳中県）。

(c)　1978年に調査。東西1500m、南北600m、面積約0.9km²。自治区文物普査弁公室・吐魯番地区文物普査隊による報告によると(1)、墳墓の封土（墳丘）は、すべて泥土と礫石を堆積しており、高さは一定していない。このうち墓区の中央部には、土梁（線欄、enclosure）をもつ墳墓群（塋）がある。土梁はほぼ正方形に近く、一辺が30m前後（小さいものは20mほど）あり、砂礫でもって線欄（高さ約30、幅約60cm）を作っている。どの土梁にも均しく外に向かって開かれる夾道（門口）が設けられており、幅は約4-6m、長さは6-8mほどである。北方向には設けられず、その他の三方向には付設が認められる。土梁の中に墳墓があり、多い場合は7,8基、少ない場合は2,3基とされる。ただし王炳華氏によれば(2)、78基の墳墓のうち、10数基の墳墓は一ヶ所に集中しており、それらは「甲」字形の土梁で囲まれると指摘される。墓道は、斜坡墓道であり、長さ約8m、幅約0.8m、正しく土梁門口に向かっている。王炳華氏によれば、封土（2-3m）・墓道の形は、吐魯番の他の同時代の古墳群と酷似しており、斜坡墓道の長さを10m～数10mの規模を有するとされる。墓誌残塼の出土（長さ16cm、厚さ5cm、

残高18cm、漢文墨書「武威」（威の文字の右側に墨書「口丑」の文字あり）とともに、墓道の側壁に、書写あるいは刻した漢文墓誌も存在する。ただし残念なことに、同古墳群は、大きな水害を被っており、そのために恐らくは埋葬されていたであろう紙・織物類はすべて朽ち果ててしまったと推測されている。

注）

（1） 自治区文物普査弁公室　吐魯番地区文物普査隊「吐魯番地区普査資料彙編」『新疆文物』1988年第3期、pp.75-76。

（2） 王炳華『吐魯番的古代文明』新疆人民出版社、1989年、pp.198-199。

〔5〕 魯克沁墓葬群（三个橋古墳群）

(a) 鄯善県魯克沁鎮三个橋村南、魯克沁鎮東南約3km。
【N 42°43′ 38″ ／E 89°47′ 55″ 】

(b) 青銅時代～隋唐時代

(c) 「吐魯番地区普査資料彙編」付載の「吐魯番地区文物分布目録」によれば、三个橋村付近の古墓群遺址は、戦国～漢代の三坎克日墓群と唐代の三个橋古墓群に分かれる。確認はできなかったが、参観は三坎克日墓群と思われる。
ちなみに『新疆文物志選稿』第二輯、p.89によれば、三个橋古墳群は二ヶ所に区分され、一つは三个橋村のもと一小隊付近にあり、一つはこれより東南500mの阿瑪夏村南墓群にあるとする。後者は、東西約200m・南北30m・面積約6,000m²の規模をもつ。発掘した墓葬は、すべて斜坡墓道洞室墓であり、墓道の長さ約3～5m、幅0.8m前後。

〔6〕 阿斯塔那古墳群

(a) 吐魯番市東南約40km。【N 42°52′ 54″ ／E 89°31′ 40″ 】

(b) 3-8世紀にわたる古墳群

(c) 当古墳群の発掘経緯については、白須浄真・萩信雄「高昌墓塼考釈（一）」『書論』第13号、1978年、pp.179-185。荒川正晴「阿斯塔那・哈拉和卓

古墳群墳墓一覧表」『中央アジア史の再検討－新出史料の基礎的研究－』（昭和63年度科研費研究成果報告書、1990年3月）など参照。張塋（206号墓等）の南東（ほぼ南）の方角に台蔵塔あり。

［４］または［５］の魯克沁古墓群からは、「高昌延和三年（604）鞏孝感墓誌」（78SLM）に「故田曹司馬」と記される墓塼が出土しており(1)、この墳墓群が高昌国時代に造営されていたことは明らかである。また王炳華氏によれば、［４］の古墳群の墳墓で、かなり大きな規模の封土を有する墳墓から、田地県において盗賊の捕獲、水利作業を管掌した官員の墓誌が出土したことを指摘される（曽選択氏による発掘整理）。年代は報告されていないが、ルクチュン（田地、柳中）は、麹氏高昌国時代であれば田地郡であり、唐西州時代であれば柳中県であるので、田地県は高昌郡時代にまで遡る。墓誌（墓塼）の存在は、高昌郡時代にもあったことは認められるので、田地県という表記が正しいものであるとすれば、これは高昌郡時代の墓塼と考えられる。従って、当古墳群墳墓は、高昌郡時代より高昌国田地県さらには西州柳中県県衙に歴代にわたって仕えた漢人豪族の墳墓である可能性が認められる。また王炳華氏は、封塚・墓道・墓室などの規模は、高昌城の郊外にある古墳群に埋葬される同レベルの官人の墳墓よりも遙かに大きいと、興味深い指摘をされている(2)。比較する具体的な数値に欠けるので確かめようもないが、田地郡は、交河公府が開かれた交河郡城とならんで、田地公府が開かれた城邑であるので、高昌城郊外の阿斯塔那・哈拉和卓古墳群の墳墓に劣らない規模を有する墳墓が造営されて当然である。

またこうした主要な城邑に近在する古墳群以外の墳墓からも、高昌国時代の墓誌の出土が認められる。たとえば采坎古墓群からは(3)、

1　章和八年戊午
2　歳三月庚申朔
3　十五日兵営主簿
4　燕国宋宇（字?）阿
5　虎

と記された墓誌が出土している。章和八年は、高昌国第三代王の麹子堅（530-548年）の年号であり、西暦538年にあたる。当地の墓表を整理された白須浄真氏によれば、現在のところ、この章和紀年を遡る麹氏高昌国時代の墓表がなく、承平13年（455）以降章和7年（537）に至るまでのおよそ80年間、墓表埋納の風が一時中断していたものが、章和という時代を期して一斉に、しかもより広範な豪族層に拡大して復活

したと推測されている。その背景として白須氏は、「王家・麴氏を頂点として麴氏高昌国の実質的な国家基盤が確立した時代である」ことに求められている。要するに麴氏王家による集権化が著しく進展した結果とされるわけである。本墓表は、まさに当地で墓表が再復活した当初のものと認められるのである。本墓表が出土した五星公社建設大隊七小隊居民村は、雅爾湖および葡萄溝（Bulaliq）に近く、埋葬者が、高昌国の交河郡周辺に位置する諸城邑に下級官吏として仕えていたことを推測させるが、ただし官職名には所属城邑（県）名が欠如していることを考えると、断定することは躊躇される。何れにしても、その墓表は既に一定の書式に則って作成されており、白須氏の先の見解を傍証している。

また既にほぼ公表されていると思われていた阿斯塔那古墳群墳墓からも、次のような随葬衣物疏が出土していたことが確認された。即ち、現在吐魯番地区博物館に所蔵される「彭夫人随葬衣物疏」（絹布　全38行、約15×50cm）である。

（　　前　　略　）

35　大涼承平十三年歳在戊戌十二月康子朔

36　十八日丁巳、大且渠武宣王夫人彭(氏?)。謹(?)條

37　隨身衣被雑物疏。所止経過

38　不得留難。急々如律令

（ただし、戊戌歳は458年＝承平16年にあたり、承平13年とは三年ずれが認められる。承平13年は、乙未歳＝455年にあたる）

阿斯塔那出土という他は詳しい情報はないが、同じく承平13年には王族且渠氏の一員である且渠封戴の墓表（TAM177号墓出土）が作成されている。且渠武宣（且渠蒙遜）の夫人となっている彭氏については、詳しいことは不明であるが、これも阿斯塔那古墳群墳墓177号墓付近に造営されている墳墓と考えて大過なかろう。今後、古墳群に関する正式な発掘報告と伴出した墓表と随葬衣物疏の全面的な公表が待たれる。

また次表に掲げるごとく、トルファン盆地においては、これまでその存在さえも知られていなかった漢～唐代にわたる古墳群が、広範に存在していたことが確認されつつある。これらは、トルファンに点在する諸オアシスに居住する人々の古墳群であり、おそらくその主体は在地において一定の勢力を有した漢人豪族層であったと推測されるが、その規模に相当な格差が認められることは無視できない。今後の高昌国研究にとって、これらの古墳群の総合的な検討は不可欠であろう。

（参考）　　吐魯番におけるその他の古墳群（唐代前後）

(1) 且克曼坎尓古墓群 （托克遜県河東郷且克曼坎尓井村）	唐代	約1,000㎡
(2) 艾丁湖古墓 （艾丁湖也木什村）	唐代	
(3) 七星湖薩依古墓 （七星湖東站南約7.5km）	南北朝～唐	約125㎡
(4) 煤窰溝古墓 （七星湖鎮南）	漢～唐	約500㎡
(5) 烏江不拉克古墓群 （勝金郷）	南北朝～唐	約300㎡
(6) 七泉湖水庫古墓群 （勝金郷）	漢～唐	約13,000㎡
(7) 阿瑪夏古墓群 （魯克沁鎮阿瑪夏村）	唐代	約3,000㎡
(8) 阿合特提日古墓群 （鄯善県達浪坎郷拝什塔木村）	唐代	約7,500㎡
(9) 吐峪溝古墓群 （吐峪溝郷霍加瑪扎村）	晋～唐	
(10) 哈日土甫古墓群 （連木沁郷丘旺克村）	唐代	3,248㎡
(11) 奇格曼古墓群 （連木沁郷丘旺克村）	春秋～唐	約600㎡
(12) 耶特克孜瑪扎古墓群 （連木沁郷丘旺克村）	唐代	約150,000㎡
(13) 墩買来古墓群 （連木沁郷東買来村南）	戦国～唐	約10,000㎡
(14) 阿克提熱克古墓群 （辟属郷蘭干村）	唐代	約180,000㎡
(15) 小蘇巴什古墓群 （辟属郷）	唐代	約40,000㎡
(16) 采坎古墓群		

（五星公社建設大隊七小隊居民村）	南北朝（高昌国時代）

注）

（1）侯燦「解放後新出吐魯番墓誌録」『敦煌吐魯番文献研究論集』第５集、北京大学出版社、1990年。ただし、正確な出土墳墓群名は明らかにされていない。

（2）王炳華『吐魯番的古代文明』新疆人民出版社、1989年、pp.198-199。

（3）吐魯番地区文管所「吐魯番采坎古墓群清理簡報」『新疆文物』1990年第3期、pp.1-7。

（３）古城遺址

〔１〕烏拉泊古城

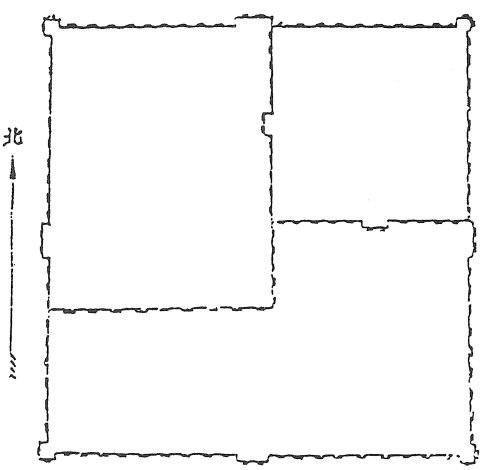
(a)　烏魯木斉市の市街南約10km。烏拉泊水庫の西南約2km。

【N 43°38′ 30″ ／E 87°35′ 14″ 】

(b)　唐～元時代にかけての古城址、唐北庭都護府（庭州）輪台県城遺址（林必成・銭伯泉・孟凡人諸氏の説。ただし、昌吉古城説＜薛宗正氏＞あり＜昌吉古城は、西遼時代より元代までの城址とする見解あり＞）。

この問題については、白須浄真氏の参考文献⑨論文に詳しく検討されている。

(c)　東西約480m、南北約550m。城内は、羊・馬の骨が大量に散乱し、陶罐・葉の広い蓮華文方磚、古銭など出土。



図二　烏拉泊古城(唐輪台)平面示意図

①林必成、p.41による。

【参考文献】
① 林必成「唐代“輪台”初探」『新疆大学学報』1979年第4期
② 王友徳「再談唐代輪台問題－兼与林必成同志商　」『新疆大学学報』1980年第3期
③ 銭伯泉「輪台的地理位置与烏魯木斉淵源考」『新疆社会科学』1982年第1期
④ 銭伯泉「唐輪台位置続考」『新疆社会科学』1984年第4期
⑤ 孟凡人「唐輪台方位考」『北庭史地研究』新疆人民出版社、1985年4月、pp.96-112。
⑥ 王明哲「烏拉泊古城和古墓葬」『新疆風物志』新疆人民出版社、1985年7月、pp.123-124。
⑦ 盧寒峰「烏拉泊古城－唐輪台遺址辨析」『烏魯木斉史志通訊』1986年第2期
⑧ 『新疆文物志選稿』第一輯、p.72
⑨ 白須浄真「長広数千里・北廷(庭)川」『東洋史苑』第32号、1988年。

〔2〕 高昌城壁

(a) 吐魯番市東約50km【N 42°51′ 02″ ／E 89°32′ 10″ 】
(b) 高昌郡・高昌国都城址。
(c) 1928年（黄文弼氏）。1953年（西北文化局新疆文物調査組）。高昌城東壁馬面の地点の版築層3.5～5cm前後。

【参考文献】（1950年代以降のみ）
① 黄文弼『吐魯番考古記』中国科学院出版、1954年。
② 武伯綸「新疆天山南路的文物調査」『文物参考資料』1954年第10期、p.79。
③ 閻文儒「吐魯番的高昌故城」『文物』1962年第7·8期、pp.28-32。
④ 侯燦「高昌故城址」『新疆文物』1989年第3期、pp.1-11。

〔3〕 交河城壁

(a) 吐魯番市西約10km。【N 42°56′ 59″ ／E 89°03′ 56″ 】
(b) 車師前王庭・交河郡（高昌国）・交河県（西州）城址。

(c)　1930年（黄文弼氏）。1953年（西北文化局新疆文物調査組）。1956年8月（首届考古専業人員訓練班）。黄文弼『吐魯番考古記』中国科学院出版、1954年。

【参考文献】（1950年代以降のみ）

① 観民「交河城調査記」『考古』1959年第5期、pp.

② 武伯綸「新疆天山南路的文物調査」『文物参考資料』1954年第10期、p.79。

③ 新疆首届考古専業人員訓練班「交河故城、寺院及雅爾湖古墓発掘簡報」『新疆文物』1989年第4期、pp.2-12。

〖４〗魯克沁古城

(a)　鄯善県魯克沁鎮。【N 42°44′ 35″ ／E 89°45′ 06″ 】

(b)　田地城（高昌郡・高昌国）、柳中城（西州）址。

(c)　矩形、東西約1000m余り・南北約400m。周囲約3km。古城西南角。高さ12m、頂上部の広さ3m以上、底辺部5m前後。版築による造営。版層は、10cmを過ぎず。唐代の陶器、鍍金銅仏像（数10cm）の出土。

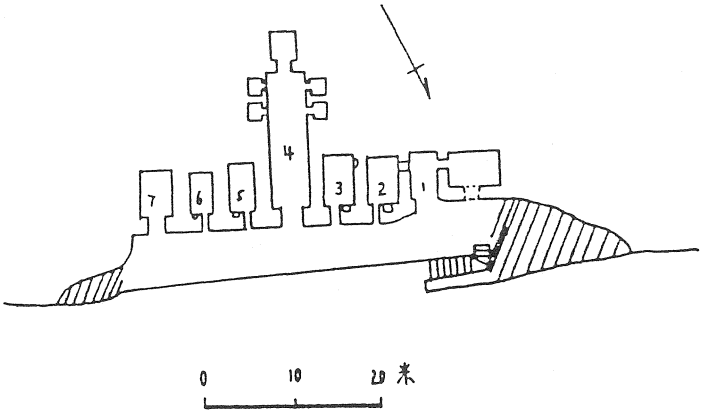
（４）石窟群

〖１〗雅爾湖千仏洞

(a)　吐魯番市の西約10km、交河故城西南河谷南岸。
【N 42°57′ 28″ ／E 89°02′ 44″ 】

(b)　車師前部晩期、約5世紀初めに開鑿・・柳洪亮説。

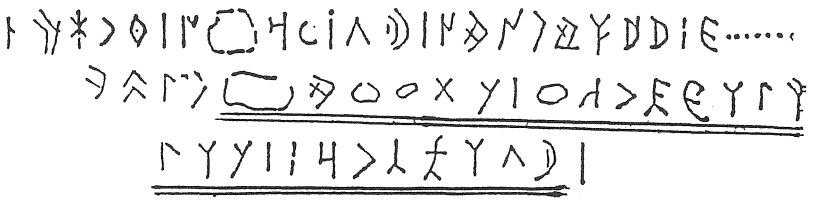
(c)　1953年、西北文化局新疆文物調査組。1960年11月新疆維吾爾自治区博物館考古隊、1961年新疆石窟調査組。
第5号窟・・・長5.7m、寛2.9m、高さ4.3mの長方形のアーチ形。
窟門東側壁面上に朱の漢字題記数行あり。※乙丑年十月廿・・・」到此西谷寺・・・」
窟内西側壁面に突厥文字を刻出（柳洪亮氏は6～9C頃と判断する）。



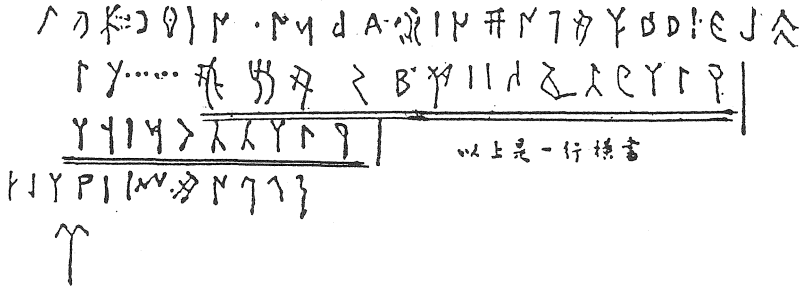
雅爾湖千仏洞平面図

【第５号窟内西側壁面・突厥文字文の録文メモ】

李徴氏（下記参考文献③）



閻文儒氏
（同上）



柳洪亮氏（下記参考文献④）

李徴・閻文儒両氏の録文中の傍線は、柳洪亮氏の筆写した個所に相当する部分を示す。これを見てもわかるように、筆写した時期は異なるものの、相互の録文には食い違う部分が多く認められる。これは題記（ただし壁画が崩落して、地肌が露出した部分に刻されているので、落書きに近いか）自体が読みとりにくく、文字の判定には相当な困難が伴うからである。馮家昇氏は、下記参考文献③の論文で、敢えて本銘文を転写・翻訳しているので、参考までに次に掲げておく。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

j,ï D' Q Q N' NG S² ö,ü …… R' D' š ,'

12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

K S² ö,ü M ö,ü P ,' M š y' y' ,' G D' T'

25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36

j,ï …… M ö,ü S² i,ï M K A,Ä K L² NG S² ……

37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48

Q O,U č G L² i,ï K …… L² NG S² ,' R' O,U

49 50 51 52 53

č č L² i,ï K ……

ïd'ᵘq qᵃn' ïng s²ü …… ᵃr'ᵃ b'ᵃš kⁱs²ⁱ omupmⁱš

圣神汗的罩中头人

y'ᵃy'l'g b'ᵃt'ⁱ[l'ⁱp] …… müs² imkä kᵃ̄l²ⁱng s³ ……

夏病下沉治療来

quč ⁱgl²ik …… ᵃ̄l²ⁱng 3s²ü l ᵃr'ᵃ uč č'l²ik ……

口肢病国家的罩中锋传令官

[译文]

"神圣汗的罩……其中头人 ömüpmiš 夏病沉重；因来治療。……口肢病。……因罩中锋传令官。"

因有脱文，完全的意思不太瞭然。大致是：汗的来罩中的一个头人夏天病得沉重，来此治療。结果把口肢的病[治好了]。因此，罩队的中锋传令官刻此以作纪念。

uč 是飞的意思；也作尖锋、侧讲。čilik 这个词各书找不到，只有 C. Brockelmann 的 Mitteltürkischer wortschatz s:56 作叶半的声音讲，今姑且译为"传令官"了但也可能是人名。

ただし、これは突厥文字銘文を左から右へ読んで解釈しており、今のところ従いがたい。これに対して、通常のごとく銘文を右から左へ読んだ場合、冒頭部にあたる傍線部の解釈に関する一つの可能性として、Küli Čor Sängünを二回繰り返したものと解する余地もあることを、T.Tekin氏より御教示いただいた。この場合、当該部分は、 𐰴𐰞𐰇𐰃 𐰇𐰃𐰍𐰀𐰇𐰞𐰃𐰚 と読むことが期待されている。Kül Čorではなく Küli Čorというかたちについては、G.Clauson,An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish,1972,p.715に、“The name of the persons commemorated in Ix(Ixe-xuşotu inscription)”と見えている。

詳しくは今後の検討に委ねるが、ただし筆写のメモによれば、この部分は、𐰇𐰞𐰇𐰃 𐰇𐰃𐰍𐰀𐰇𐰞𐰃𐰚 𐰞𐰇𐰃 𐰇𐰃𐰍𐰀𐰇𐰞𐰃𐰚 と見え、二文字目の𐰞は、どう見ても𐰀であり、iとしか解せない。また四文字目は、iではなく、gのようにも見える。その後の三文字をČorと判読することは十分に可能と思われる。

また柳洪亮氏は、本石窟を車師人の仏教文化の現れとみなしている。柳洪亮、次掲④論文。『出三蔵記集』巻一〇など参照。

【参考文献】

① 武伯綸「新疆天山南路的文物調査」『文物参考資料』1954年第10期、p.75。

② 閻文儒「新疆天山以南的石窟」『文物』1962年第7·8期、pp.58-59。

③ 馮家昇「一九六〇年吐魯番新発現的古突厥文」『文史』第3輯、1963年（再録；『馮家昇論著輯粋』中華書局、1987年10月、pp.491-502。）

④ 柳洪亮「雅爾湖千佛洞考察随筆」『敦煌研究』1988年第4期、pp.45-50。

〔２〕雅爾湖千佛洞

(a) 吐魯番市東北約50km。【N 42°57′18″／E 89°32′19″】

(b) 麴氏高昌国～15世紀中葉（柳洪亮説）。

(c) 中国では、1928年（黄文弼氏）。1953年（西北文化局新疆文物調査組）。1961年（新疆石窟調査組）。

【参考文献】（1950年代以降のみ）

① 黄文弼『吐魯番考古記』中国科学院出版、1954年。

② 武伯綸「新疆天山南路的文物調査」『文物参考資料』1954年第10期、p.75。

③　閻文儒「新疆天山以南的石窟」『文物』1962年第7·8期、pp.55-57。
④　村上真完『西域の仏教　ベゼクリク誓願画考』第三文明社、1984年。
⑤　柳洪亮「新疆吐魯番柏孜柯里克新発現的影窟介紹」『敦煌研究』1986年第1期。
⑥　　同　「柏孜柯里克石窟年代試探」『敦煌研究』1986年第3期。
⑦　　同　「柏孜柯里克新発現的《楊公重修寺院碑》」『敦煌研究』1987年第1期。
⑧　　同　「高昌碑刻述略」『新疆文物』1991年第1期、pp.59-68。
⑨　森安孝夫『ウイグル＝マニ教史の研究』朋友書店、1991年。
⑩　新疆維吾爾自治区博物館（編）『新疆石窟　吐魯番伯孜克里克石窟』上海。

窟内はほとんど参観できなかったが、新出の碑文の存在を写真で確認。
「唐貞元六年（790）西州造寺功徳碑」（1989年5月、80窟西南の廃虚出土、77窟に保存。碑高64×寛90×厚さ25cm、漢文陰刻30行。行書）
「［　　］林　僧宝蔵施州城常田捌畝、又于州城買常田参畝」「［　　］于州城妙徳寺造僧院壹所并建□□□道場」などの文字あり。

［３］勝金口千仏洞

(a)　吐魯番市東北約40km。【N 42°55′ 02″ ／E 89°33′ 52″ 】
(b)　唐?～元代?の仏教遺址。
(c)　中国では、1928年（黄文弼氏）。1953年（西北文化局新疆文物調査組）。1961年（新疆石窟調査組）。

【参考文献】（1950年代以降のみ）
①　黄文弼『吐魯番考古記』中国科学院出版、1954年。
②　武伯綸「新疆天山南路的文物調査」『文物参考資料』1954年第10期、p.75。
③　閻文儒「新疆天山以南的石窟」『文物』1962年第7·8期、pp.57-58。

ただし、参観したのはオルデンブルクの言うｘｐａｍ（寺院）№１０（現第２号窟）のみ。Ольденбург, С. Ф., Русская Туркестанская Экспедиция 1909-1910 года., Санктпетербург. 1914. pp.37-44, XXXVII～XLI. 中国壁畫全集編輯委員会編『中国壁畫全集　新疆６吐魯番』遼寧美術出版社・新疆人民出版社、1990年、p.160の勝金口石窟参照。なお、勝金口付近には現在もなお多くの寺院址が残されている。①勝金口仏寺（１～４）（勝金郷大橋西南）・・・晋～元（7,450m²）。

②勝金口含利塔群（千仏洞西北）・・・唐代。「吐魯番地区普査資料彙編」「吐魯番地区文物分布目録」の８９等。

［４］　吐峪溝千仏洞

(a)　鄯善県県城西南約40km。

(b)　現存窟の年代については、十六国時代と麴氏高昌国時代の二つの時期に区分することができる（賈応逸氏の見解）。

(c)　中国では、1953年、西北文化局新疆文物調査組。1961年、北京大学教授・閻文儒氏と新疆維吾爾自治区博物館館長・沙提氏による測量、作図、撮影作業。1966年以降、吐魯番地区文物保護管理所による保護管理作業。

【参考文献】（1950年代以降のみ）

①　武伯綸「新疆天山南路的文物調査」『文物参考資料』1954年第10期、p.75。

②　閻文儒「新疆天山以南的石窟」『文物』1962年第7･8期、pp.58-59。

③　賈応逸「吐峪溝石窟探微」『絲綢之路造型芸術』新疆人民出版社、1985年9月（須藤弘敏訳「トユク石窟考」『仏教芸術』186号、1989年、pp.62-81。）

以上の［１］を除く石窟群については、以下の報告書も参照。

① Ольденбург, С. Ф., Русская Туркестанская Экспедиция 1909-1910 года., Санктпетербург. 1914.

② Grünwedel, A. (1) Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902-1903. München 1905/1906.
(2) Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan. Bericht über archäologische Arbeiten von 1906 bis 1907 bei Kuca, Qarašahr und in der Oase Turfan. Berlin 1912.

③ Le Coq, A. von (1) Chotscho. Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der ersten königlich preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan. Berlin, 1913.
(2) Die buddhistische Spätantike in Mittelasien, I-VII. Berlin. 1922-1933.

④ Stein, M. A., Innermost Asia. Detailed report of explorations in Central Asia, Kansu, and Eastern Iran, Oxford, 1928.

（５）その他

〖１〗台藍塔

(a)　吐魯番市・阿斯塔那村<三堡村>【N 42°52′ 08″ ／E 89°31′ 05″ 】

(b)　麹氏高昌国時代の仏塔？。5-10世紀。

(c)　底辺37×37m、残高約20m余り。

【参考文献】（1950年代以降のみ）

① 自治区文物普査弁公室　吐魯番地区文物普査隊「吐魯番地区普査資料彙編」『新疆文物』1988年第3期の「吐魯番地区文物分布目録」の97。